令和４年度小松市立安宅中学校　学校評価1（年度末）

めざす児童生徒像

『智仁勇　未来を拓く生徒』
「智」　深く考え、判断できる生徒
「仁」　思いやりのある生徒
「勇」　自ら行動できる生徒

※児童生徒達結果－教員結果･保護者結果

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目		中間 数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	年度末 数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	達成状況の分析	改善策
学校重点項目（学校で設定）	規律ある行動・自己有用感の醸成	生徒指導	･④を90%以上にする	①	学校では自分は大切にされている。		87				94			①７%の増加。教職員の褒め・認める声掛けやストック運動などでの思いやりの心の醸成により、自己肯定感が高まってきていると考えられる。 ②９%の減少。とくに２・３年生が14%減少。小学校から続く人間関係の中で、関わりづらさを抱いている生徒も多くいるのではないかと考える。 ③３%の増加。行事等での一人一役など、意図的な仕掛けによって生徒に活躍のチャンスがあったと考えられる。	①今後も褒め・認める声掛けをタイムリーに継続的に行っていく。また、ストック運動をさらに啓発して、思いやりのあふれる集団づくりを実践していく。 ②相談しやすい雰囲気を作り、ライフ等を活用して、生徒の気持ちに寄り添えるようにしていく。 ③一人一役を継続して行い、活躍の場を与え、褒め・認める声掛けのチャンスをつくっていく。 ④１年生に対しては、学年集会による啓発に加え、「友達の良いとこ見つけ」により絆や自己肯定感を高めていく。 ⑤２年生に対しては、相談体制を充実させ悩みを確実に受け止めるとともに、各人の努力を認め、協力して学校生活を送れるような人間関係をめざす。
				②	学校にいると安心する。		86				77				
				③	学校では自分が役立っていると感じる。		64				67				
				④	学校が楽しい。		87				87				
				⑤	みんなで何かをするのは楽しい。		93				92				
				集計			83				83				

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目										達成状況の分析	改善策
石川県共通重点項目	働き方や業務の改善		･①について100%にする	①	80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	65				100				①、③において、肯定的回答が100%になったことから、時間外勤務の削減や定時退校を全教員が意識したということが伺えた。 ②、④に関しては、中間評価より大きく下回る結果となった。当初予定より業務が増加していると感じている教員がおり、業務を抱え込んでしまっていることが原因としてあげられる。また、２学期は行事や研究発表会などが立て続けにあり、見通しをもって業務を遂行しても、ゆとりをもてない状態にあったと考えられる。	時間外勤務の削減や定時退校の意識は今後も引き続き行っていく。そのために、学年・分掌での協力体制をとることや業務の精選を学校全体だけでなく、個人レベルでも考えていく。 １，２学期を振り返り、優先順位を決めるなど業務遂行の見通しをもつことや、業務の効率化について改めて考えていく。
				②	学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができている。	94				75					
				③	月１回定時退校ができた。	76				100					
				④	計画的に休養をとることができた。	76				46					

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目		数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	達成状況の分析	改善策
小松市共通重点項目	指導力の向上	学校研究	･すべての項目で90%以上にする	①	研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元（授業）構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	94				77				①90%に届かなかった。原因として、目指す授業スタイルを共有し、具体的な取組を共通実践してきたが、各教科の単元構想シートの活用が浸透していないことや、実践の振り返りが不十分だったことが考えられる。 ②教科会では、目指す生徒の姿を実現するために、教科を越えて具体的に子供の姿を語りあった。また、道徳科での授業研究会では、全教師が自分ごととして考える機会を工夫をすることで、主体的に取り組むことができた。	教科会や授業研究会などの際には、その都度学校研究における授業づくりの重点や、目指す生徒の姿、目指す授業スタイルなどを研究主任が確認していく。また、各教科の単元構想シートについては、改良し次年度につなげていく。
				②	授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	94				94					
				集計		94				86					
		「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善	･①～⑤の生徒のアンケートの割合を90%以上にする	①	生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	82	81		-1	100	77		-23	①「生徒が主役」の授業づくりを意識してきたことで、教師の結果は100%となった。しかし、生徒の①の意識は低い。原因として、考える必要性のある問いになっていなかったり、考える時間が足りなかったりすることがある。 ③発表の機会はあるが、生徒が自分の考えをうまく伝わるよう工夫する必要がある発表の機会が不足していた。 ②④２学期より「考えを深めるための交流の仕方」を共通実践してきたことで、教師・生徒ともに話し合い方を意識するようにはなったが、効果的に使いこなせなかったと感じている教師や生徒がおり、考えを深めたり広げたりすることにまで至らなかった。 ⑤生徒と教師で振り返る活動の内容やその意味をくり返し確認してきたことで、「振り返る」ということが浸透してきた。ただ、学びの変容の実感や達成感を感じるところにまで至っていないと感じている教師や生徒がいるためこの結果に留まっている。 ⑥教師の結果が改善した。ねらいの達成に向けた効果的なICTの活用を呼びかけてきたことで、授業において使う機会が増えた。 ⑦教師の結果が下がっている。原因としては、書かせてはいるが、自分の考えがうまく伝わるような工夫が足りないと感じている教師がいることがある。 ⑧ねらいの達成にむけ、個に応じて指導に生かす評価を意識しているが、90%には届いていない。	①生徒が自ら考えたり、取り組んだりできるよう、教師は考える必然性のある発問を準備し、十分な時間を与えて取り組ませるようにする。 ③資料や既習事項を根拠に、理由を示して発表する機会を確保する。 ②③④２学期より共通実践している「考えを深めるための交流の方法」について検証し、改良したうえで、再度生徒と目的や意図を生徒と確認し実践を続けていく。また、「聴く」ということや学びのマップについて、徹底させていく。 ⑤引き続き「ねらいを明確にした授業構想の工夫」を授業づくりの視点として意識した授業づくりを推進していく。 ⑥引き続きGIGA推進担当と連携して、職員会議などの際に、ねらいの達成に向けた効果的なICTの活用を呼びかけていく。 ⑦自分の考えを記述させるときに、本時で用いたキーワードを使って書かせるなど、具体的な手立てを準備する。 ⑧ねらいの達成につながる単元の指導と評価の計画を立て、適切な場面で評価していく。
				②	生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。	100	92		-8	80	87		7		
				③	生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	82	78		-4	86	73		-13		
				④	生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え（自分と同じところや違うところ）を受け止めて自分の考えを伝えている。	94	94		0	67	90		23		
				⑤	生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり、学びに対する達成感を得られたりしている。	94	96		2	88	92		4		
				⑥	生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	71	96		25	85	91		6		
				⑦	生徒は、自分の考えを書く機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して書いている。	88	80		-8	69	80		11		
				⑧	一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行っている。	88				79					
				集計		87	88			82	84				
	学力の定着	カリキュラム・マネジメント	･①、②の平均が 中間85%以上 年度末90%以上 にする	①	指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	94				94				①教科会・学年会でカリキュラムマップの内容を見直し、効果的なカリキュラムマップの作成につなげていく意識が図られており、目標指標を達成できた。 ②職員会議にて実施状況や修正点を確認でき、84%となった。検証の強化という視点から、生徒の実態を踏まえた成果や課題をもとに改善策を講じていく必要がある。 ③各教科において、学力調査の結果を踏まえ、重点課題を抽出し、知識・技能の定着や活用力向上のための具体的な取組を共通理解した。取組の確実な実施にやや課題が見られ、88%となっている。 ④学力調査の結果分析にとどまらず、授業づくりに関する合同研修や研究発表会など、小学校と交流する機会を適宜設定してきたため、目標指標を達成できた。	①年間を通して教科会・学年会でカリキュラムマップの内容の見直しを行い、来年度のカリキュラムマップの作成につなげていく。 ②今後も学校力向上ロードマップを活用し、職員会議にて実施状況や修正点を確認する。生徒の実態を踏まえた成果や課題をもとにより効果的な教育活動の計画を講じていく。 ③今年度の取組を踏まえ、課題を抽出する。特に知識・技能の定着や活用力向上のための取組を共通理解し、実践する。 ④主任・主事による小中連携（情報交換）を行い、学習（提出物など）や集団づくりなど、基本的な学習基盤の確立を目指す。年度当初に行われる進級テストの内容について小学校に情報提供を行う。また、英語については小学校で身につけさせたい内容について共通理解を図って独自の評価問題を作成し、課題等を共有する。
				②	生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のＰＤＣＡサイクルを確立している。	82				84					
				③	全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	94				88					
				④	校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。（小中連携）	82				94					
				集計		88				90					
		家庭学習	･①の項目で80%以上にする。 ･④の項目で90%以上にする。	①	家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し方等を校内で共通理解を図っている。	65				75				①②③週末課題として、Qubenaのワークブック配信を実施した。また、生徒の学習意欲を高めるために学年の状況に応じてリーダー会による家庭学習啓発の取組を実施した。その成果は見られたと思うが、全体的には75%となった。 ④教科のワークやプリントなどを活用し、日々こつこつと取り組めるように教科担当から見通しを持たせた家庭学習課題を提示した。また、リーダー会の取組の成果が見られ、46%となった。	①③④翌日の授業で活かされる内容など各教科の特性を踏まえて、必要感のある家庭学習について検討していく。本当に力がついたかは教師の見取りによって形成的評価を積み重ねていくことがとても大切である。確実につけたい力が身についたかという視点を常に持って授業に活かす。また、家庭学習については１年生からの積み上げがとても重要である。３年生になって受験勉強を頑張るのではなく、１年生からの家庭学習習慣の定着を意識して指導していく。 ②Qubenaのワークブック配信を中心に学習用端末を活用した家庭学習を行う。
				②	学習用端末を活用した家庭学習に取り組めるよう課題を工夫している。	65				78					
				③	自分で計画を立てて勉強している。	53	64	64	11	77	59	62	-18		
				④	1週間に10時間以上を目標にして達成することができている		40				46				
				集計		61	52	64		77	59	62			